

月刊 ウィーン

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊33年目 **Nr. 384**

GEKKAN-WIEN 2021年12月号



Porträt einer jungen Frau, bekannt als „La Bella“ Palma il Vecchio (1480–1528) Um 1518/20 Leinwand, 99 × 76 cm
Museo Nacional Thyssen-Bornemisza, Madrid © Museo Nacional Thyssen-Bornemisza, Madrid

杉本純の原子力の話II ウィーンと京都

117

第六次エネルギー基本計画が十月二日、閣議決定された。三年ぶりの改定。同計画策定に向けては、総合資源エネルギー調査会で昨秋より議論が本格化し、新型コロナウイルスの影響、昨冬の寒波到来時の電力需給やLNG市場、菅義偉首相（当時）による二〇五〇年カーボンニュートラル（当時）による二〇五〇年カーボンニュートラルの実現宣言への対応などが視座となり、ワーキンググループやシンクタンクによる電源別の発電コストに関する精査、二〇五〇年を見据えた複数シナリオ分析も行われた。八月四日の同調査会基本政策分科会で案文が確定。その後、九月三日〜十月四日にパブリックコメントに付せられ、資源エネルギー庁によると期間中に寄せられた意見は約六千四百件に上った。

新たなエネルギー基本計画は、引き続き「S+3E」（安全性、安定供給、経済効率性、環境への適合）に重点を置いており、「二〇五〇年カーボンニュートラル」の実現に向けては、経済産業省が六月にイノベーション創出を加速化すべく「四の産業分野のロードマップ」として策定した「グリーン成長戦略」も盛り込まれた。同基本計画の関連資料「二〇三〇年におけるエネルギー需給の見直し」で、電源構成（発電電力に占める割合）は、石油二〇％、石炭一九％、LNG二〇％、原子力二〇％、再生可能エネルギー三六〜三八％、水素・アンモニア一％となっている。

エネルギー基本計画の閣議決定を受け、萩生田光一経産相は談話を発表。その中で、「福島復興を着実に進めていくこと、いかなる事情よりも安全性を最優先とすることは、エネルギー政策を進める上で大前提」との認識を改めて示した上で、「基本計画に基づき、関係省庁と連携しながら、全力をあげてエネルギー政策に取り組んでいく」としている。

エネルギー基本計画の概要

令和三年10月
資源エネルギー庁

<https://www.jaif.or.jp/journal/japan/10284.html>

〇年カーボンニュートラルを目指し、今後あらゆる可能性を排除せずに脱炭素のための施策を展開するという、わが国の強い決意が示されており、大変意義がある」とのコメントを発表。再生可能エネルギーの主力電源化、原子燃料サイクルを含む原子力発電の安全を大前提とした最大限の活用、高効率化や低・炭素化された火力発電の継続活用など、バランスの取れたエネルギーミックスの実現とともに、昨今の化石燃料価格高騰に伴う電力供給・価格への影響にも鑑み、国に対し、科学的根拠に基づいた現実的な政策立案を求めている。

また、原産協会の新井史朗理事長は、理事長メッセージを発表。二〇五〇年カーボンニュートラルを実現するため、同基本計画が、原子力について「必要な規模を持続的に活用していく」としたことに際し、「エネルギーシステム脱炭素化における原子力の貢献に対する期待が示された」、「原子力産業界としては、その責任をしっかりと受け止めなければならない」としている。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市出身の偉大な生理学・医学者（その一）を紹介したい。ローベルト・バーラーは一八七六年にウィーンに生まれ、ウィーン大学で耳鼻咽喉学を学び、フランクフルト・アム・マイン市立病院内科に勤務。一九〇二年にはウィーン総合病院で外科医として研鑽を積む。〇三年にはウィーン大学医学部外科学教室に就く。〇五年に耳鼻科学の創始者と呼ばれたH・デヴィッド・ポリツァアの助手となる。めまいる研究を進め、内耳に水を注入するとめまいに加え、不随意眼球運動が起こること、温水と冷水では逆方向の眼球運動が起こることを確認。眼球運動は三半規管を満たすリンパ液の対流によること、水の温度によって対流の方向が逆になること、三半規管内の感覚毛こそが体の位置感覚を生むことを確認。これを応用し、水を使った試験によりさまざまな耳の疾患の診断法を確立。これらの功績に対し、一四年講師時にノーベル生理学医学賞を受賞した。第一次世界大戦には軍医として従軍、ロシア軍の捕虜となったが病により釈放。二十七年にスウェーデンのウプサラ大学教授に就任した。

■ 杉本純 元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■



生まれ、東京日比谷高校卒業後、五九年に京都大学理学部に入学し、化学科を卒業後は同大学院理学研究科に進学、同大学ウィルス研究所の渡辺格教授に師事するものの、同教授の薦めもあり中退して、分子生物学を研究するため六三年、設立されたばかりのカリフォルニア大学サンディエゴ校へ留学した。六八年、カリフォルニア大学サンディエゴ校博士課程を修了後の六九年、米ソーク研究所・ダルベック研究室でポスト・ドクター・研究員となり、七一年にはスイスのバーゼル免疫学研究所の主任研究員として、私たちの体がさまざまなウィルス・病原菌の種類一つ一つに合わせた抗体を作るのは、遺伝子が変化するため、という事実を世界で初めて突き止めた。マサチューセッツ工科大学生物学部およびがん研究所教授時の八七年に免疫クローニングの特異な遺伝子構造を解明した功績によりノーベル生理学・医学賞を受賞した。マサチューセッツ工科大学・ピカウア学習・記憶研究センター所長、理学研究所脳科学総合研究センター長、沖縄科学技術大学院大学学術理事などを歴任した。

余談であるが、筆者は小学生の頃、三半規管の働きが不十分だったのか良く乗り物酔いをしたが、大人になって治った。科学を目指す若者に向けた「大切なことは問題を見つめる能力、それをあきらめずに解決する能力、それ自体を楽しむ能力、そして柔軟性」との利根川博士のメッセージは貴重である。今月も両市に関連する偉大な生理学・医学者を紹介することができた幸運に感謝しつつ、編集部撮影をお願いしたウィーン大学内にあるバーラー二のフォートインスタイルシヨンの写真を掲載させていたたく。

杉本純の原子力の話II 「ウィーンと京都」の第1回からの全記事が次のサイトに掲載されています：<http://wattandedison.com/Sugimoto.html>



ロックダウン in ウィーン

感染者増加と病床切迫によりオーストリア全土で11月22日からロックダウンに突入。12月12日まで続くことが11月29日に発表された。劇場や商店などが閉鎖され、全日外出制限ではあるが、郵便局・銀行・薬局・タバコ屋・花屋・食料品店・スーパーマーケット・ドラッグストアなどは開店、スキー・スケート場も営業可、通勤・通学・生活必需品買出し・散歩などでの外出は許可されている。

